

第 39 回土木計画学研究発表会（春大会）：2009. 6. 13～14（徳島大学）

企画論文部門 セッション討議内容の記録

セッション名：地域のための景観マネジメントを考える	
日付： 6月13日(土曜日), セッション時間：8：30～10：00	
オーガナイザー・司会者名（所属）：岡田智秀（日本大学理工学部）	
討議内容	<p>セッション全体：</p> <p>■当セッションは、土木計画学研究小委員会に属するワークショップ「地域のための景観マネジメントワークショップ」の取り組みのひとつとして設置したものであり、そのねらいは、「地域のための景観マネジメントのあり方や課題等」について、ワークショップメンバーのみならず、幅広く意見を集い、議論を深めるというものである。</p> <p>当セッションの冒頭では、まずそうした主題解説を当ワークショップ代表の佐々木葉氏（早稲田大学）より挨拶がなされ、その後4編の発表（1題12分）を連続して行い、残りの時間（40分）で質疑・討議を行った。</p> <p>その質疑・討議では、まずはじめに、各発表内容の理解を深めるという趣旨のもとに、個別の発表内容に関する質疑応答時間を設け、その後に共通論題として「地域活力を高めるうえで景観形成が地域に果たす役割や課題等」について議論を行った。</p> <p>■個別議論は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・当初は各発表の扱う景観対象がまちまちのように思えたが、発表内容を聞いてみると「持続可能な景観づくりはどうすればよいか」という論点に集約できる。（岡田）</li><li>・各発表は、地域活性化をねらいとして実施したインフラ整備や再開発行為が、新たな景観問題を露呈した実態を浮き彫りにした。（佐々木）</li><li>・今回の各発表にあった事例を通じてみると、景観法や景観計画があくまでもスタートラインと位置づけたとき、現状の多くは景観計画の「具体的な目標像」が設定されていないようであるし、それがあつたとしても関係者間で共有されていないように思う。また、「誰のための、誰による景観づくり」とかという、景観まちづくりの「主体」と「役割」についても議論していく必要があるようにおもう。（岡田）</li></ul>
	<p>（166） 真田純子（徳島大学大学院）</p> <p>■地域活性化をねらいとした観光資源としての「かづら橋」と観光サービスとしての「大規模駐車場」との景観コンフリクト（特に社会構造に着目して）を問題提起した内容。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・地域住民はこの駐車場をどのように受け止めているか？ →建設前から周辺の景観破壊を懸念していた。これを食い止められなかった当該地域の社会構造をひも解く必要がある。</li><li>・「かづら橋」は定期的に架け替えがあるというが、その費用はどのように工面しているか？ →橋の通行料でまかなっている。</li><li>・駐車場があることの経済波及はいかに？ →直接の影響かわからないが、周囲の店舗は苦しそうである。</li></ul>

(167) 添田信行 (㈱オリエンタルコンサルタンツ)

■都市構造と空間の意味から「まちの記憶」を抽出し、その記憶の継承が持続できる景観づくりを論じた内容。

・分析資料で「市制要覧」を使用した意図は何か？

→行政のまちに対する意識を読み取りたかったため。

・それがどれだけの妥当性や意義性をもつか？

→この文献ひとつでどれだけのことがいえるかわからないが、他の文献も複数活用し、ワークショップにより住民意識も捉えているので、複眼的にまちの意識がよみとれたことに意味があると考えている。

・分析資料を選定する段階が最も重要なので、十分に吟味する必要がある。

・このマップは何のために作ろうとしているのか？

→まちに対する人々の意識が集中する場所を抽出して、それを整備と保全のよりどころにしたいと考えている。

・マップに布置した拠点間の関連性を考察すると、その拠点のみならず、拠点間の移動空間のあり方まで考察できるように思う。

→ぜひ参考にしたい。

(168) 押田佳子 (日本大学理工学部)

■鉄道(電車車窓)という公共視点場から眺望できる「緑地景観」の視認特性を明らかにし、その眺望に経済的利益を与えることで、持続可能な緑地景観マネジメントを提案した内容。

・印象調査を行った際に、聞き取り結果よりどのように「良い印象」「悪い印象」を判断したのか？

→聞き取りの際に、「良い」「悪い」印象を合わせて聞き、対象者の印象を正確に捉えるよう配慮した。

・「緑地」といえば一般的に「環境」が重視され、景観以上に環境配慮がなされると考えられるが、環境配慮については特に考えなかったのか？

→大都市近郊であり長きにわたり農業を営んできたという立地特性から、長期モニタリングを必要とするほどの生態系は成立しないと捉え、まずは地域イメージにつながる「景観」の保障について言及した。

(169) 横山あおい (徳島大学大学院)

■中心市街地の衰退を食い止めるために景観協定を実施した事例(大阪ミナミ地区)において、景観協定の現状課題を提起した内容。

・衰退の時期と要因はなにか？

→街の衰退の時期は、今から10年ぐらい前から、要因は、高齢化や後継者問題、経営不振などにより、所有者の入れ代わりがおこり、地域規範が薄れ、無秩序化が起こったことによる。

・景観形成がうまくいっていない背景として、具体的な目標像が設定されていないのではないかと？

→コンセプトはそれなりに妥当なものが設定されている。

・コンセプト内容が妥当だとしても、それを文章だけで目標像を設定しようとすると、個々人で解釈がまちまちになってしまいがちであるし、そのトラブルを避けようと、個々人が二の足をふんでしまう可能性が懸念される。具体的な絵姿を議論して、目標像として定めることが重要であるように考える。

→コンセプトは、文章だけでなく、1000枚近い街の写真を皆で、研究し、それを元にイメージパ

ースを作り、目に見えた共通の目標像としている。また、景観協定についても、商業地域であるため、街並み保存などで行われる建物の色などを設定する手法ではなく、けばけばしい色の禁止などという表現にとどめ、街が望まない建物や看板のデザインなどについては、デザインマニュアルの写真などで説明し、委員会で審議するというソフト面に対応することとしている。景観形成がうまく行っていない背景は、借主の地位が認められているため入替わりの激しい雑居ビルに対して、テナントを含めた全員合意が難しいことが主な原因である。

※発表件数に応じて適宜追加してください。